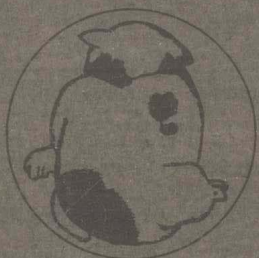


南総里見八犬伝

八

曲亭馬琴作
小池藤五郎校訂

岩波書店



南総里見八犬伝

八

曲亭馬琴作
小池藤五郎校訂

岩波書店

南総里見八犬伝 (凡) (全一〇冊)

一九八五年六月一七日 第一刷発行 ©

定価二六〇〇円

校訂者 小池 藤五郎

発行者 緑川 亨

発行所 株式会社 岩波書店
〒101 東京都千代田区一ツ橋 二五五

電話 〇三・六五・四二二
振替 東京六・六二四〇

印刷・精興社 製本・文勇堂

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN 4-00-004318-8

解 説

夏に茄子^{なす}三百個、冬に干大根^{はしだいこん}三百本受け取る約束で汲取^{くみとり}をさせた練馬村^{ねりまむら}の伊左衛門が、天保二年七月十八日に馬琴の勝手口へ納めた茄子は二百五十個であった。馬琴夫婦、宗伯夫婦、女中一人、太郎・つぎの二人の孫の七人暮しゆえ、子供二人を大人一人と見なし、一人当り五十個の約束であったが、十五歳以下は人数に入れないという世間の慣例で、二百五十個の茄子を持参したのであった。馬琴はその不信を怒り、嫁のお路^{みち}の取次^{とりつぎ}で、結局冬の大根を三百本納めるように確約させ、茄子は持ち帰らせた。こうした納物^{おさまもの}の際は昼飯を振舞う約束であったが、馬琴の方でも報復として空腹のまま百姓を帰らせてしまった。この冬の十一月十日に干大根三百本は滞^{とど}りなく納められ、

沢庵漬三樽、内壺番座食^{ざぐ}六十本、ぬか三升塩一升八合。式番百本、ぬか五升塩四升。三番、ぬか三升塩六升五合。右三樽おみちお百両人にて漬^そ畢^{はん}。残り四十本はぬかみそへ入。

の如く翌十一日に漬け込まれた。しかし、十二月二十八日に至って、百姓は汲取謝絶を申し込んできた。結局、従来通り汲み取らせることになったものの、ほろ苦^{にが}さを馬琴一家は感ずるのであった。

神仏・祖先の祭り、家族の健康と病氣治療、売薬の製造と販売、隣家との交渉、親戚知人間の煩雑な交際、出版書肆しよしや気まぐれな訪問客の取り扱いなどから、居つかぬ下女の心配、味噌・砂糖・薪炭・漬物・野菜等の日用品の購入、庭で実った葡萄などを商人に売り渡すこと、悪少年に葡萄・柿・柘榴等ざくろを盗まれぬ用心、鼠・猫・犬等の妨害に至るまで、夜も睡らずに氣をくばり、一糸の乱れもない規律的生活を続けて来たのは家長としての馬琴であった。

家内留守中日々參候野菜売罷まかりこし越候に付、予玄関え出、白瓜直段ねだん付居候内、隣家常貞老妻垣越に貌かほを出し、垣越に大根をかひ取、右代錢八文此方玄関前へ投わたし候非礼、傍若無人のいたし方に付、予たへがたく、右野菜うりを罵りいましめ候処、わびに付、尚又向後をいましめ用捨に及び畢をはんぬ（天保二年八月十二日の『日記』）

なども馬琴一家の生活態度の一面であった。書齋に籠っていた彼は、取次によって他との談判を行った。妻のお百はこうした取次に出て、時に馬琴と衝突して同士どうし討を演じ、癩症かんしようの宗伯はしばしば相手と喧嘩になり、嫁のお路の取次が最も談判を円滑に運んだゆえ、多くはお路が取次に出た。

八丈伝九輯三十二の巻、奥目録特に人名〇等壹丁半稿レ之。細書にて今日眼氣不レ宜、ことの外手間どり夕七半時頃辛うじて稿し畢（天保十年四月二日の『日記』）

の如き苦悩と、家庭生活の赤裸々の姿を併せ眺めるとき、やかまし屋、吝嗇漢りんしょくかん、利己主義者など

の誹謗^{ひぼう}は妥当でなく、あまりに綿密であり整い過ぎた生活態度から醸^かされる苦^くさ弱^{じやく}さに同情される。

馬琴の『日記』は東京帝大・早稲田大学両図書館に多数所蔵されていた。東大の分は天保五年の原本、天保二年の謄^{とうしやほん}写本を残して、関東大震災で焼失。丹念な生活記録が失われて痛惜^{つうせき}に堪えない。

(昭和十五年五月)

凡 例

一、校訂には『南総里見八犬伝』の初版本を用い、校正は毎回原本に拠って厳重に行った。

二、読みやすくするために、左の諸点に特色を持たせたほかは、全く原本通りにして置いた。

(1) 本文に段落を設け、詞には鈎(「」)を施し、仮名の濁点・半濁点は適宜に補った。

(2) 冒頭の漢文の序の繫符(一)を除き、目録は仮名交りに改めて本文中の回号に一致させた。

(3) 本文中に和歌・詩文・その他が挿まれている場合には、それを抜出して別行とした。

(4) 原本の文章はすべて句点(。)で切つてあるが、それを読点(・)・句点(。.)に分けて用いた。名詞を重ねた場合で、原文に句点がない時だけ、並列点(・)を附けて置いた。

(5) 原本中の文字・仮名づかいの甚だしい誤謬——例えば「城平等」を「城兵等」に、「聡察さつはいち智」の「そうさつはいち」を「そうさつえいち」に訂正——は訂正して置いた。

(6) 原本の仮名づかいは「亡父」・「滅亡」・「亀篠」・「亀篠」等の如くに、同一の文字についてもしばしば不統一である。かかる点は、むしろ時代の仮名づかいと、作者自身の特徴とを知る上から、原本通りにした。ただし「人物一覧」には多く用いられている方を振って置いた。

(7) 馬琴の特色ある文字使用法を保存するために、極力原本通りの漢字を用いた。ただし「也」・「歟」その他を仮名書にした。「漁夫」の如き場合には左側の片仮名のみを削った。
なり か ぎよふ
リヤウ

〔編集付記〕

旧岩波文庫版『南総里見八犬伝』全十巻(小池藤五郎校訂、昭和十二〜十六年刊)を改版するにあたって左の改変をくわえた。

一、旧岩波文庫版を底本とし、国立国会図書館蔵の初版本『南総里見八犬伝』(架蔵番号別三―一〇六一―)と対校して誤植などを訂した。

一、右国会図書館本により、旧岩波文庫版で省かれていた挿絵を余すところなく補った。

一、漢字は新字体を用いたが、仮名づかいは初版本どおりとした。

一、底本で使われている異体字のうち、迺・羣・晉・曾など、いくつかを通行の漢字(逃・群・腰・胸)に改めた。

一、読みやすさの便をはかって振り仮名の一部を省略したが、人名・地名などの固有名詞はこの限りではない。

一、底本の()は原本の割注を示しているが、今回これを〔 〕に改めた。原本の欄外注は「」に収めた。一、各輯の総目録は訓み下し文に改めたが、本文中の回号との異同は初版本のままとした。

(岩波文庫編集部)

話の筋（第八冊の分）

〔第九輯〕（卷之二十四より卷之三十二まで）

首尾よく使命を果たした犬江親兵衛は、一日も早く安房国へ帰りたいかった。將軍の命令——政元はこう偽って、照文だけを帰国させ、親兵衛を屋敷内の一室に幽閉した。紀二六は砂糖餅売に身を賣して入込み、饅頭の中へ密書を籠めて徳用の悪計や政元の奸計を親兵衛に知らせた。

先年結城の法場で懲された悪僧の徳用は、政元の家老の香西復六の子で、政元とは乳兄弟であった。彼は政元に向かって里見氏の反心、親兵衛の悪逆などを讒訴した。政元は親兵衛を愛し、徳用の讒言を信じなかった。徳用は苛って、親兵衛の武勇を試す試合に自身をも加えてもらい、親兵衛を打ち殺して怨を晴らそうとした。

当時京都の五虎と呼ばれた武道の達人たちに徳用を加え親兵衛と立ち合せることになった。遁れる術もなく、第一の試合に鞍馬海伝真賢を鉄扇で撃ち据え、次々に五虎を破り、遂に徳用を打ち懲した。彼の武名はいやが上に高く、政元は若鮎の名刀や何やかと与えて親兵衛の引留めに苦心した。

豊後国大友の家臣の竹林巽（後に巽風）は、朋輩の妻と密通して出奔し、丹波国で不思議の童

から巨勢金岡筆の「無瞳の虎」の一軸を奪って浪速へ遁れた。それを祿齋屋余市という骨董商の手を経て政元に見せたところ、権威に任せて瞳を入れさせた。虎は忽ち絵絹を脱け出て、巽風を噛み殺し、市中を荒れ廻った末、洛北の白河山へ姿を隠した。政元は大いに驚き、賀茂河原に防禦の武士を配備したが、被害は日に加わるばかりであった。止むなく親兵衛の抑留を解いて妖虎退治を命じた。万一にも妖虎を退治したら、主家へ帰してもらうことを条件として、親兵衛は妖虎退治を引き受けた。

悪僧の徳用は管領の屋敷から雪吹姫を盗み出したが、白河山の青面堂で妖虎に会い、右腕を噛み切られた。姫は姥雪代四郎・紀二六らに救われた。

単騎白河山へ分け入った親兵衛は、伏姫神の冥助で妖虎の両眼を射て、見事に退治した。折よくも紀二六が来たので、虎の見張りを命じ、自身は近江の辛崎を指して山越に馬を駆かせた。

辛崎の関守は、政元から貰った関手形を認めたが、妖虎退治の実証が挙げらぬことと、行動に不審の点があるので親兵衛を捕えようとした。止むなく関を破って走り、阪本・大津の両関の援兵に道を遮られた。大津の宿で管領政元が追い付き、徳用らの奸計を語り、妖虎退治の手柄を褒め、また秋篠将曹は叡感浅からざる旨を述べ、親兵衛に従六位上と兵衛尉を賜ったことを伝えた。親兵衛は光栄に感激しつつ安房へ向かった。徳用は吟味の後、首を刎ねられた。

安房の里見家では、扇谷家の動静を探らせる目的で、相模・武蔵の方面に間諜を放って置いた。

その報告によると、扇谷定正は遺恨骨髓に徹する八犬士と旧臣河鯉孝嗣が、里見家に仕えていることを知り、非常に不快に感じ、旧怨のある山内顕定と和睦し、湊我成氏を誘い、武蔵・相模・上野・下野・越後等の大軍を催して、里見家を伐つための軍略を進めているとのことである。これを聞いた里見義成は、重臣・犬士らを集めて軍議を開き、房総五十余城の兵を挙げ、毛野を軍師として、乾坤一擲の大戦争の準備を着々と進めていた。

主要人物一覧(第八冊の分)

○信乃・莊介・現八・道節・小文吾・毛野・大角・親兵衛 八大士。

足利義尚 細河政元 義尚は將軍。政元は管領。政元は將軍の命令と偽り、親兵衛の帰国を許さなかつた。

徳用 堅削(禄枳坊・陸枳坊) 徳用は結城の逸足寺の前住。堅削はその侍者。しばしば親兵衛を讒した。

香西復六時長 香西再六政景 復六は政元の老臣。再六はその倅で、徳用の異母弟。後に、復六の家督を継いだ。

雪吹姫 政元の養女。実は今出川義視の妾腹の子。徳用に誘拐され、姥雪代四郎等に救われた。

無敵斎経緯 京都五虎の一人。柔道・捕術の名人で細河家の師範。親兵衛との試合に敗れた。

鞍馬海伝真賢(真方) 京都五虎の一人。剣術の名人。親兵衛との試合に敗れた。

澄月香車介直道 京都五虎の一人。將軍家の臣で槍の名人。親兵衛との試合に敗れた。

種子嶋中太正告 京都五虎の一人。政元の家臣で鉄砲の名人。親兵衛との試合に敗れた。

紀内鬼平五景紀 政元の近習。親兵衛との試合に澄月を助けて敗れた。後、澄月に賀茂河原で討たれた。

あきしのしやうそうひろまさ
秋篠將曹広当

京都五虎の一人。弓術の名人。親兵衛との試合に敗れた。後に勅使となつて安房へ下つた。

たかはやしつみ そんふう
竹林巽(巽風)

同一人。丹波国の薬師院村の絵馬師。山幸樵六を殺し、「無腫の虎」の一軸を携へて浪速に出奔した。禄斎屋余市と共に政元の屋敷に上がり、「無腫の虎」に腫を点じて、その場で虎に噛殺された。

おとこ
於兔子

竹林巽と密通してその妻となる。後に仏罰により山幸樵六に射殺された。

みなくりへい
箕梨九里平

丹波国薬師院村の絵馬師。竹林巽夫婦を養子として家業を譲つた。

やまさちしやうろく
山幸樵六

巽に絵馬の下地材を売って生活したが、妖怪と誤つて於兔子を殺し、巽に殺された。

ろくさいやよいち
禄斎屋余市

京都の骨董商。竹林巽風を政元に紹介した罪で殺された。

おいかぜみくろ
順風耳九郎

千里眼八。共に澄月香車介の弟子。賀茂河原の乱闘で斃れた。

みたりあしへい
三田利吾師平

藻洲千重介(千重作)。三田利は種子嶋、藻洲は鞍馬の家来。賀茂河原でそれぞれの

主人を斃したが、後に誅せられた。

のみにとりまなご
野見鳥真名五郎梭条

政元の臣。賀茂河原の乱闘を糺明し、吾師平・千重作の奸悪を発いた。

おいまつこだいふ
老松湖大夫惟一

根古下厚四郎鶴宗。大杖意鬼入道稔物。それぞれ近江の辛崎・阪本・大津の

関所の頭人。

こくちきかんた
漕地喜勘太

親兵衛の若党、阪本の関に火をかけ、親兵衛の危難を救つた。

くまがやまじま
熊谷援二郎直次

一色駿馬幸通。共に東山殿義政の近臣。

大岸法六郎澄妙
ありやなしはち
蟻屋梨八

斎藤左兵衛佐高実
さいとうさひょうえのすけたかまね
しもこうべしやうじゆきかね
下河辺莊司行包

里見家の右筆。照文に従い、親兵衛の赦免を願う使者となつて京都に赴いた。
武藏国墨田川の渡守。穂北の郷士落鮎有種の老僕世智介の叔父。忍岡の城に拘
留された。

山内顯定の臣。顯定を説いて定正を助けさせた。
藩我成氏の家老。定正を助けて里見家を討つことの不可を説いたが用いられな
った。

目 次

解 説

凡例・編集付記

話の筋(第八巻の分)

主要人物一覽(第八巻の分)

南総里見八犬伝(八)

八犬伝第九輯下套下引

南総里見八犬伝 第九輯下帙之下甲号五巻目錄

第九輯卷之二十四

第三百三十六回

政元權を弄びて正副使を分つ
大江別に臨て忠良僕を借る

第三百三十七回

能弁軍記を講じて餅を薦む
窮鳥旧巢に還りて巧に轉る

三七

第九輯卷之二十五

第三百三十八回

士卒矛盾して自家を防ぐ
餅書教に因て秘密を告ぐ

三六

第三百三十九回

五条の頭に代四郎宿憂を啓く
擊劍の場に親兵衛武芸を見す

三七

第九輯卷之二十六

第三百四十回

大江仁名を華夏に揚ぐ
左京兆恩を東臣に厚くす

三八

第三百四十一回

悪報明を失ふて更に懺悔を事とす
神助妬に因て反て冥罰と成る

三九

第九輯卷之二十七

第三百四十二回

両滅を誣て辰巳誑簡を貽す
故事を尋て政元名画を疑ふ

四〇

第一百四十三回

虎眼に点して巽風公文庁を鬧す
衆口を數ふて京兆禄斎屋を誅す
..... 一五

第九輯卷之二十八

第一百四十四回

大江前諾して関符を請ふ
澄月が一謀五虎を殲す
..... 一七

第一百四十五回

五頭を献りて衆奸卒數頭を喪ふ
脚小を櫃にして惡師徒手足を斷る
..... 一〇四

八犬伝第九輯卷之二十九簡端或説贅弁

南総里見八犬伝 第九輯下帙之下乙号上套目錄

第九輯卷之二十九

第一百四十六回

白河山に代四郎小姐を救ふ
談講谷に親兵衛大虫を射る
..... 一三三

第一百四十七回

紀二六月下に真刺に逢ふ
親兵衛湖上に三関を破る
..... 一五四